

法華経をナラティブに語る

今、「ナラティブ」(narrative)という言葉が、医療・教育・ビジネスなどの分野で注目されている。「ナラティブ」は、「物語」あるいは「語ること」と訳される。一般的に「物語」を意味する英語とえば、「ストーリー」(story)の方が馴染みがあるだろう。「ストーリー」は、始まりから結末までがすでに決定したテキストの形で保存され、内容が変わらずに伝えられていく「固定的な物語」である。

一方、「ナラティブ」は「語る」という行為に重点が置かれた「物語」である。「ナラティブ」は決まった結末を持たず、語る者によって常に新たな展開を迎え、変化する「開放的な語り」なのである。「ナラティブ」は人と人との「対話」の中で共有され、伝播する。そして、人々は知らず知らずのうちに、「ナラティブ」にすっかり染められていく。この「ナラティブ」という概念を用いて仏教の現状を見てみると、世間の「ナラティブ」が変化しているにも関わらず、僧侶がかつての時代の「ナラティブ」を継続してきた結果、世間の人々と僧侶との間にズレが生じているのが、今という時代なのではないだろうか。これからの時代には、客観的な情報としての知識をただ伝えるのではなく、未完結の物語の登場人物の一人として聞き手を参加させるような語り方 (upāya-kauśalya 善巧方便) が求められる。

宗教学者の島藺進氏は、『仏教の底力—現代に求められる社会的役割—』(明石書店 2020)において、大菅俊幸氏との対談の中で、次のように述べている。

「私は仏教学のあり方も変わってほしいと思っています。そして大学も変わってほしい。たしかに、経典の中にある本来の教えとされているものと、現実の中で機能する宗教的なものとの間が遠くなっています。それをつなぐような研究や活動に研究者も取り組まなければならないと思います。」(p.104)

つまり、世間の変化にも対応できず、経典本来の教えからも離れてしまった「旧型ナラティブ」は、一刻も早く捨てなければならない。「法華経をナラティブに語る」とは、単なる知識として法華経という物語を伝えるのではなく、「まだ終わっていない物語」としての法華経に、聞き手が登場人物の一人として参加していくような語り方を模索することである。そのためには、まず語り手である僧侶自身が、法華経の登場人物の一人としての当事者意識を持っていることが条件となるであろう。